特別
イ 4
3159
A14

14
3159
A14

樂府錄

東墨會

愈墨蒙

㊀同字異音

音	訓
衣(イ) 衣裳・衣類・更衣	衣(エ) 白衣・紫衣・法衣 衣紋竹
依(イ) 依然・依頼	依(エ) 依怙・帰依
一(イチ) 一人・帰一・一分・一二	一(イツ) 統一・合一
逸(イツ) 散逸・独逸	逸(イチ) 逸物・逸速し・逸足
越(エツ) 偖越・甲越	越(エチ) 越前・越後
渇(カツ) 飢渇・渇望	渇(カチ) 消渇

九華堂書記

東墨會

八幸堂藏書

吉（キツ）吉事・
子（シ）利子・逗子・養子・孔子・獅子・子弟
司（シ）上司・有司
事（ジ）事務・執事・檢事
州洲（シウ）亜細亜州・西郷南洲
質（シツ）性質・質朴・硬質
周（シウ）周章・周囲
主（シユ）主人・民主

吉（キチ）吉例・長吉（名）定吉（名）
子（ス）椅子・扇子・茄子・硝子・拂子・樣子・金子
司（ス）下司
事（ズ）好事家
州洲（ス）清州・白州・洲本・洲崎
質（シチ）質屋・質置く・質種
周（ス）周防
主（ズス）法主・坊主

守（シユ）守護・國主
須（シユ）必須・須臾・須彌山
朱（シユ）朱墨
首（シユ）首尾・首領
宿（シツ）宿泊・宿命
駿（シユン）駿才・駿馬
達（タツ）達文
筑（チク）筑前・筑後・筑紫

守（ス）留守
須（ス）急須・須藤（須べからく）
朱（ス）朱雀門
首（ス）首藤
宿（スク）武内宿彌
駿（スン）駿州（スルガ）駿河
達（タチ）友達・安達・俺達（オダチ）
筑（ツク）筑波・筑摩　筑紫

東京堂蔵書

築（チク）建築・築城
秩（チツ）秩序・良秩
頭（ヅ）頭痛・牛頭馬頭
鉢（ハツ）衣鉢・鉄鉢
罰（バツ）天罰・刑罰
埒（ラツ）放埒
律（リツ）法律・律令

築（ツキ）築地・都築・築山
秩（チヽ）秩父
頭（ヂユウ）饅頭
鉢（ハチ）皿小鉢・托鉢・鉢巻
罰（バチ）罰があたる
埒（ラチ）埒が明く・埒を結ぶ
律（リチ）律義者

大東堂蔵書

東京堂蔵

繕（ゼン）口輪を（クチワとり）
素 素面（スメン）素性（スジヤウ）
素人（シラウト）
司 篠筒（シノヅツ）
宗（シウ）崇（スウ）
取（シユ）諏訪（スワ）
勝 勝村（カツムラ）勝田（カツタ）
十勝（トカチ）
畢 筆筑（ヒツチク）

九華堂蔵書

(二) 動詞の語尾

動詞の語尾の変化は頗る面倒なるが更に口語独の如くさまざまなりて益々複雑多岐なるを見る、之が為語尾変化の経路を辿げ其接続関係なる假名遣を示すべし尤も必要なる分ハ、ス、ハ、チ、ツ、ジ、ズ、イ(井)、エ(江ヘ)等、之をとりて示すべきものまでなれ為さるものを掲ずに止む

動詞の語尾変化

(将然)(連用)(終止)(連体)(既然)(命令)

バンに続くズ

テ(デ)リ(ル)マス動詞に続く

切レに続くベシ(ベカラズ)

名詞に続く

バに続くヨ

四段活

サ行（刺ス）	サ	シ。	ス。	ス。	セ
タ行（打ツ）	タ	チ。	ツ。	ツ。	テ
ハ行（追フ）	ハ	ヒ。	フ	フ	ヘ。
ア行（植ウ）	エ。	エ。	ウ	ウル	ウレ

下二段活

サ行（走ス）	セ	セ	ス。	スル	スレ
タ行（捨ツ）	テ	テ	ツ。	ツル	ツレ
ハ行（教フ）	ヘ。	ヘ。	フ	フル	フレ
ヤ行（消ユ）	エ。	エ。	ユ	ユル	ユレ

上二段活

タ行（落ツ）	チ。	チ。	ツ。	ツル	ツレ
ハ行（強フ）	ヒ。	ヒ。	フ	フル	フレ
ヤ行（老イ）	イ。	イ。	ユ	ユル	ユレ

上一段活

ア行（射）	イ。	イ。	イ。	イル	イレ
ワ行（居）	井。	井。	井。	井ル	井レ

不規則サ行（爲）

	セ	シ。	ス。	スル	スレ

(一) 四段活

凡て動詞の活用の發音及び假名遣を示さんとせば、同じ資格のまぎらはしからざる行例へば力行の如きものと比較するときは容易に其正確を會得し得べし左の如し

	(將然)	(連用)	(終止)	(連體)	(既然)
カ行 (書ク)	カ	キ	ク	ク	ケ
サ行 (消ス)	サ	シ	ス	ス	セ

即ちテ、タリ又は他の動詞に續く場合には、連續ぶりし

書きて「書きたり」「書き綴り」といふやうにキ即ちイ列より續く、故にサ行にもイ列即ちシより續き、「消シテ」「消シタリ」「消シ終ル」となる、「消ステ」「消スタリ」「消スス終ル」とならざることを會得し得べし、タ行・ハ行も同例なり

	(將然)	(連用)	(終止)	(連體)	(既然)
カ行	行キテ	行ク人	行ケバ		
サ行	指シテ	指スベシ	指ス人	指セバ	

タ行　打チ。マス（テ）　打ツベシ　打ツ人　打テバ

ハ行　追ヒ。マス（テ）　追フベシ　追フ人　追ヘバ

繰り返して「ふる」「打ツ人」か「打チ人」か、チ・ツの區別不明なる場合には、カ行の例へば「行ク」を見本として「行ク人」と云ひて、ク即ちウ列より連續する故、タ行に於てもウ列即ちツより續き「打ツ人」が正しく「行チ人」は正しからずと知るべし、一見頗る複雜なれども慣るれば案外容易なり御忘れなし

動詞が其儘名詞のやうに用ゐらるるときは連用言を用ふべきことも他の行（左例マ行）のそれと對照して容易に納得し得べし

マ行　「讀ミ」が不明だ　本「讀ミ」

タ行　「持チ。」が宜しい・樹立チ。・金「持チ。」

サ行　「押シ。」が強い　後「押シ。」

ハ行　「問ヒ。」が正しい　言「問ヒ。」

ふる如し

なほ茂に注意すべきは、単に動詞の次に名詞が續く場合には前述の如く連躰形なりすると動詞と名詞との二ツ合せて、一ツの複合名詞のやうに用ゐらるゝ時は連續言すりすることあり、此の区別大事なり、これも例へば力行と對照すれば明なり、左の如し

	（連躰）
力行	浮ク舟
サ行	越ス家
	（複合名詞）
	浮キ袋
	越シ方

タ行	待ツ人
ハ行	吸フ汁
	待チ人
	吸ヒ物

次にハ行の場合は前表の如く、連用（ヒ）と既然（ヘ）とを区別するが必要なれ、これも他の行（左例タ行）と對照すれば明瞭なるべし、即ち

	（連用）	（既然）	（命令）
タ行	毀チテ	毀テバ	毀テ（ヨ）
ハ行	訪ヒテ	訪ヘバ	訪ヘ（ヨ）

以上は同じ四段活の場合なれども、後に説く下二段活が混同する所を問題とする問題を惹起すべし

左の例を見よ

安物買ヒ。（正）　乗り換へ。（正）

同じ連用止にても前者はイ列まで ヒ、後者はエ列まで へなり、こゝに「買ヒ」は四段活なる故イ列（前例ヒ）が連用にて、「換へ」は下二段活故エ例（前例へ）が連用なるべなり、前表まで甚已別を知

又し、故に厳密に假名遣を矯正せんとせば、何こゝ動詞は何活用言なりやを豫め知りおく必要あり、然らざる限り東北人は到底正確なる発音及び假名遣ひを期待し難きこと、なるべし、

左に参考の為四段活の例を掲げ置く

廿行　刺ス・指ス・越ス・虐ス・消ス・押ス・詐ス・殺ス

タ行　打ツ・待ツ・言ヒ（動詞）建ツ（自動）勝ツ

ハ行　逐フ・吸フ・買フ・購フ・償フ・元フ・孵フ・殉フ・問フ・思フ

(二) 下二段活

下二段のついては前表動詞活用の変化を注意して見るに、ア行・ハ行・ヤ行は凡て エ又はヘとなり、イ又はヰにあらず、即ち凡てが エ列であり、サ行及びタ行のみは、ス・スル・スレ・ツ・ツル・ツレの如く全部ウ列となり、イ列即ち ミ又はチにあらざる故最も記憶し便なり

左に下二段活の例を掲げん

ア行 植ウ

サ行 走ス 失ス 献ス 載ス

タ行 捨ツ 満ツ 建ツ(他動)

ハ行 教フ 苔フ 生フ 考フ 憂フ

ヤ行 消エ 済フ 覚エ 絶エ 越エ 潰エ

凍エ 煮エ 冷エ 聞エ 見エ 癒エ 燃エ 吠エ 萌エ

ワ行 植ウ 飢ウ 据ウ

以上四段活用標準、例へば カ行下二段「受ク」を例にとり、これと比較して活尾を考へ、今はすべて大過ぐ

きを得ん、左の如し

カ行　受ケ　―ク

タ行　捨テ　―ツ　切　ベカラズ

サ行　失セ　―ス　終止

ハ行　教ヘ　―フ　ウ列　ヨリ

ヤ行　消エ　―ユ

（テ　タリ　マシ　タ　候　連用　エ列　ヨリ）

然りとして若例へば「教ヘ」が下二段か、又は次に述べる上二段かが、初めより不明の場合に、元来イ（ヒ）と

エ（ヘ）との発音の区別すら甚しむ東北人が「教ヘタリ」か「教ハタリ」か不明なる時なる故、上二段活と下二段活とは常に紛惑しおく必要あり、「教ヘ」は下二段活なれば、ハ行の変格なる「教ヘ」と云へど、「教ヒ」とふることなし。之を会得するを要す、頗る苦命なれども、なほ次項に述べんとする所、必ずしも、

九華堂蔵書

(三) 上二段活

上二段の中ハ行及びヤ行の如きは、ヒ及びイより連續し、エ・ヘ・エ等の語尾は絶對なかし、而し上二段か下二段か区別し難き時は矢張り同じ錯誤に陥ることあり、例へば「老ユ」はヤ行上二段活にして「老イ」と変化し「老エ」と変化せざるも、「老イ」が上二段活なることを知らざるかぎり「老エ」と誤りて其言し又は讀み書きすること想像するに難からず、されば上二段か下二段かを区別することが尼介なることと下二段活の場合の述べたるが如し、幸に上二段活は語数少き故、先づ左記の上二段活を心得(おき)他は下二段と心得ることを至便なり

ダ行　落ツ　朽ツ　閉ヅ　恥ヅ　焚ヅ　怖ヅ

ハ行　弾フ　誣フ　寤フ

ヤ行　老ユ　悔ユ　報ユ

ワ行　用ウ　率ウ

更に問題となるは、タ行上二段なるが將然と連續
するは、チより後き其他はツより後くこと前表にて
知るべし、而してこゝに注意すべきは四段活用動詞、上二
段より名詞まづき、即ち動詞と名詞とを一つの複合
名詞となる場合とを、此際の連用言を用ゐること四段
活と同じ

（連新）（複合名詞）

タ行　落ツル石　落チ點　落合（オチアヒ）

ヤ行　悔ユル涙　悔ヒ改メ

動詞が其儘名詞の如く用ゐらるゝは、又連用言より
丈、「話の落チは面白い」「老イも若きも」の如し
なる口語、脚本に於ては文語と異なる表言が著しく
り、「定ムル」を口語にて「定メル」とふが如し

落ツル　耻ツル　（文語）
落チル　耻チル　（口語）

共に濁りにあらず、文語と口語とのくらり区別あるべ

(四)一段活

前表の通りイ又は井まで別又他の數言と混同することなく、凡てイ段に活用すれば可なり、

鋳ル・楽ル・用ヰルの外左の二活あり

弓を射る　エ　たゝかひ

宝を居る　エ　たゝあれ

(五)不規則變化

不規則変化才変に詞尾となるはサ行まで、唯爲の一活あるのみなれど、凡ての他の名詞、又は準名詞を用ゐらるゝ動詞、時には形容詞ともつゞき、廣く用ゐらるゝを以て特に注意すべきなり

勉强(名詞)シテ、ス、スル受身、スレバ

働キ(準名詞)シテ、ス、スル能力、スレバ

美シク（形容詞）シテ、ス、スル掃除夫、スレバ

即ち前表する通り連用形の外はス、スル、スレバ

スレバシ言ふまでもなく、而も連用形に為るものも多

くテ、タリ（其変化）ケリ（其変化）他の動

詞及び仮活のマス（其変化）等に連續し

て盛く用ゐらる、左の如し

テ――タ

タリ――タレバ――タルニ

勉強シ

ケリ――ケレバ――ケルニ

マス――マシタ――マセン

始ム――メ候（動詞）

其他改氏場合は反對ニス（終止の場合）スル、スレ

の外は、凡てシなりと認定すれば最も便利なる

ん、此注意は非常に重要なれば軽々に付せられ

ざらんことを望む、此点を注意すれば「勉強スル

マシタ」「勉強シルガ」などの誤謬を免るゝこと疑ひなし。

(三) 助動詞

助動詞とは其の自身に独立せる意義なく、主として動詞、形容詞又は名詞又は形容詞の語尾に附きて、種々の意味を添ふる語なり。「積ミタリ」「打タシム」「人ナリ」「美シキナリ」のタリ、シム、ナリ、の如し、而して助動詞につき普通の注意すべきは、(一)助動詞の自身及び(二)其先行する動詞の語尾の連接関係なりとす

(一) 助動詞自身の假名遣

其の表音のまゝに易きもの多し

(将然)	(連用)	(終止)	(連体)	(既然)
働カ…セ	セ	ス	スル	スレ
押サ…シメ	シメ	シム	シムル	シムレ
努力…サセ	サセ	サス	サスル	サスレ
讀マ…ズ	ズ	ズ	ヌ	ネ

外に「飲ムベシ」「学ムラシ」「行ナジ」「書カマシ」「流シツ」「時ナリシ」等、假名遣ひし易きもの多し

ベシ・ラシが多く用ゐらるゝのみにて、ジ、マシ、ツ、シ(其変化のシカ)等は今日の文語若くは口語にては殆ど使用されず、故に各助動詞がシムの変化及びベシ、ラシの三者がシ音なるも、他は凡てス、ズ音なりと記憶すれば足る、即ち

乃ち秦に使せしむ

酒は飲むべし而毒多の如

可愛らしき子供

等の如きはシ音なく、凡てス音と知るべし

以上を主として文語なるが、口語に於ては

(イ) マス。……例 有りマス。 有りマスから

(ロ) デス。……例 僕佐藤デス。

(ハ) ナイ。……例 散々な物ラナイ。

(ニ) マシ。……例 お休みなさいマシ。

等誤り易きものなり、

為作

マスの変化

(ホ) マシタ

(ヘ) マシテ

以上の表及び実例よりして如く口語に於ては(イ)マスがス音にて其変化(ホ)マシタ(ヘ)マシテはシ音なり、東北特に北奥の人々は、此のマスをマシと発音し、仙台地方にては反対にマシタ、マシテを マスタ、マステと発音する傾向あり、(ロ)デスをデシと発音するなども其一例なり、(ハ)ナイはイ音にして エ音にあらざること勿論なれども、これをナ、イと発音せずして ネアというが如き一種の拗音まがひのものは特に注意を要す、

(ニ)マシは強くマセの訛りと変化せるものなるべく、これは東北地方にては同方言にあらざるも他方出身の者にて「行っていっ

しやマス（マセ又はマシとふ）さきと　などいふ
ことを屬と為するものなり、此場合のマシは
イの場合のマスとは全然意義の異なること
なりまでもなし

二　助動詞の連續關係

助動詞は前述の如く、他の品詞に附隨する語
なれば、助動詞自身の發音と共に先行
の語、特に動詞との連續關係につき注意
する要あり、例へば上二段活「落ツ」より助
動詞につづく場合を考へるに

落ツ
- チタリ　チズ　チマセン　正
- ツタリ　ツズ　ツマセン　誤

の如し、チとツとの發音に先天的の区別あるが如
く、此等の区別を判然とさすべきか
は、又反対なる問題として他人の想像も及ば
ざるところなり、嗚呼

今此種の活用を矯正する方法を考へんに、
動詞の各音化するとき、まぎらはしかるべ
きものと認定するが目的なること、動詞の
場合を正くたるべし、例へば前例又然りて、
「落ツ」は上二段活用故、例へば力行上二段
「起ク」に倣ひて
起クー落ツ
落ツー又も都を落チさせ可し

の二者を比較し、サセは「起キサセ」の如く連用
言「起キ」より續く故に「落ツ」も其連用言
「落チ」(別)より「サセ」を續きて、「落チサセ」と
云ひ、「落ツサセ」とはぬことを明かにするが
如し、此る場合に混淆なる如くなれども慣れ
ば苦みなかるべきなり故に右の例見出り
尚此種の誤りは主として上二段活の動詞又
多きものなれば、上二段活を下二段活の動詞と、和

如是誤りてはなはだもし誤き故、此所右の通
別に特る利害と記載しおくべきこと前述の
如し、例へば「報ユ」はヤ行上二段活用なるを、下
二段活用と誤解して、「報ユ。報イタリ」といふべき
を「報エタリ」と表言しては、折角俗語
用ゐて此特てもこれを正すこと能はず、
それ故に最項動詞の例表をよく展ぬし
各動詞につき、何れの変格に属するものか
を、のび易き変化をも、充分知悉し置く
事肝要なりとす

四　形容詞の語尾

副詞・接續詞及テニハ

(一)形容詞――の語尾は

重――ク　シ　キ

美――シク　シ　シキ

の如く二種の変化あり、こゝを「クシキ活用」「シクシキ活用」といふ、而し何れもシ音のみ多く、故に平此人は唯輕シ、樂シクと書き、

大音に響らざるやう注意すれば足る、口語にて甘イ、面白イといふイは勿論キの音便(さきのべを省きたるもの)なれば工と記るべか らず

悲シキ哉(正)　悲シイ哉(正)

悲スキ哉(誤)　悲シエバ(誤)

悲スエ哉(誤)

(二)副詞――と一言にいへど

美々シク見エタリ（形容詞）
有意義ニ活動ス（名詞）
働キテ食フ（動詞）
などの例を見るべし、他の品詞が副詞として
用ゐらるゝ場合甚だ多し、唯爰にては本来
の副詞なるシス、チツ、ジズ、イエ等の事に
人にすぐらはしと思ふるものを列記して
注意を促す一資たるに止めん

シ＝シバシ（暫し）　シバシバ（屢〻）
シバラク（暫く）
ス＝スデニ（既に）　スコブル（頗る）
ヒタスラ（只管）　スガラ（道スガラ）
ツ＝ツラ〳〵（倩〻）　ツトニ（夙に）
ヅヅ＝カナラズ（必ず）　ツカラ（ロヅカラ）
（三）接續詞
シ＝シカリ（然り）　シカシ（然シ）

シカシテ（而シテ）　シガツテ（従テ）
シカノミナラズ（加之）
ツヰ　カツ（且）　アマツサヘ（剰ヘ）
等は為に間書ひ易き接続詞の例なり、只我
國に於て接続詞といふは頗る意味不明なりて
例へばシカリ、シカノミナラズのごときは、本来の意
義より見て如何かと思はるれども、暫く接続詞
中に収め置くものとす

（四）テニハ

テニハ又はテニヲハなども人の言葉と関係
あるものはなほ左の六種なり
（イ）ヘ　スラ　サヘ（ツ）　ツヽ（シ）
其内ツヽシは今の通俗語には多く用ゐ
らるゝず、即ち
天ツ風　外ツ國
身にシみれば　我りなシも

のみし、故に殘りの四ッに付
へ、及びサ、ペーのへは工音にて イ音あり
ス、ラーのスは シ音にあり
ツ、ーは チ音にあり
の三点を注意すれば足るも、尚は仮法として
は高すべきもの多少あり、左に二三を掲ぐ
(ロ) シカ
一すシカ 勉強しない

さて場合のシカなり、スカと数音せぬ心まし
(ハ) ニ又はへをサ
ニ(位置)又はへ(方面、加へて)とふ場合に、
ロ強にてサを用ふる時、第一音にて甚だ
しき軽ざはりなり
机の上に本を置く (正)
アメリカへ行く (正)
さてはさを

仙台ヤ見物ヨ行く（誘）

十サニをたすと十二（誘）

の如し、これは事柄のこと、かりん関係の場合に時々多く用ゐらるゝ標準語として

は絶対に使用すべきものたるべきもの、かりん語の

注意すべし

（二）バカリをバリ

これは俗語に過ぎざるも、バカリとふべきをバリと表言する人少かりん

これバカリは反対です。（西）

少しバリ送金した（誘）

（ホ）サヘ又はシカを

前掲のめく表言乃び仮名遣に注意し、サヘ

をサイ、シカをスカと表言する人かりざるは

勿論、所ゝ方ゝは

サヘと表言する人多し

又はシカの代りに、

少しサヤかない（ミヤガが西しい）
金サヤあれば（サヤ人ガ西しい）
ヤ如し、ゑりは赤のみるべし外も行はん
てみるべし西しかしべ
附て或国（越ヤか）の人のリをルと語るを聞きて釣りに行くを
釣に行くと云て、ゑもシをスと語ると差なし
越後の人は、ユをヨと語る夕（夢）みたさふやさをヨーヂヨメ見たと
ふゝゑ（はヤ）スをソと語るに同じ、天皇（メヂギ）・角力（スモウ）ちど

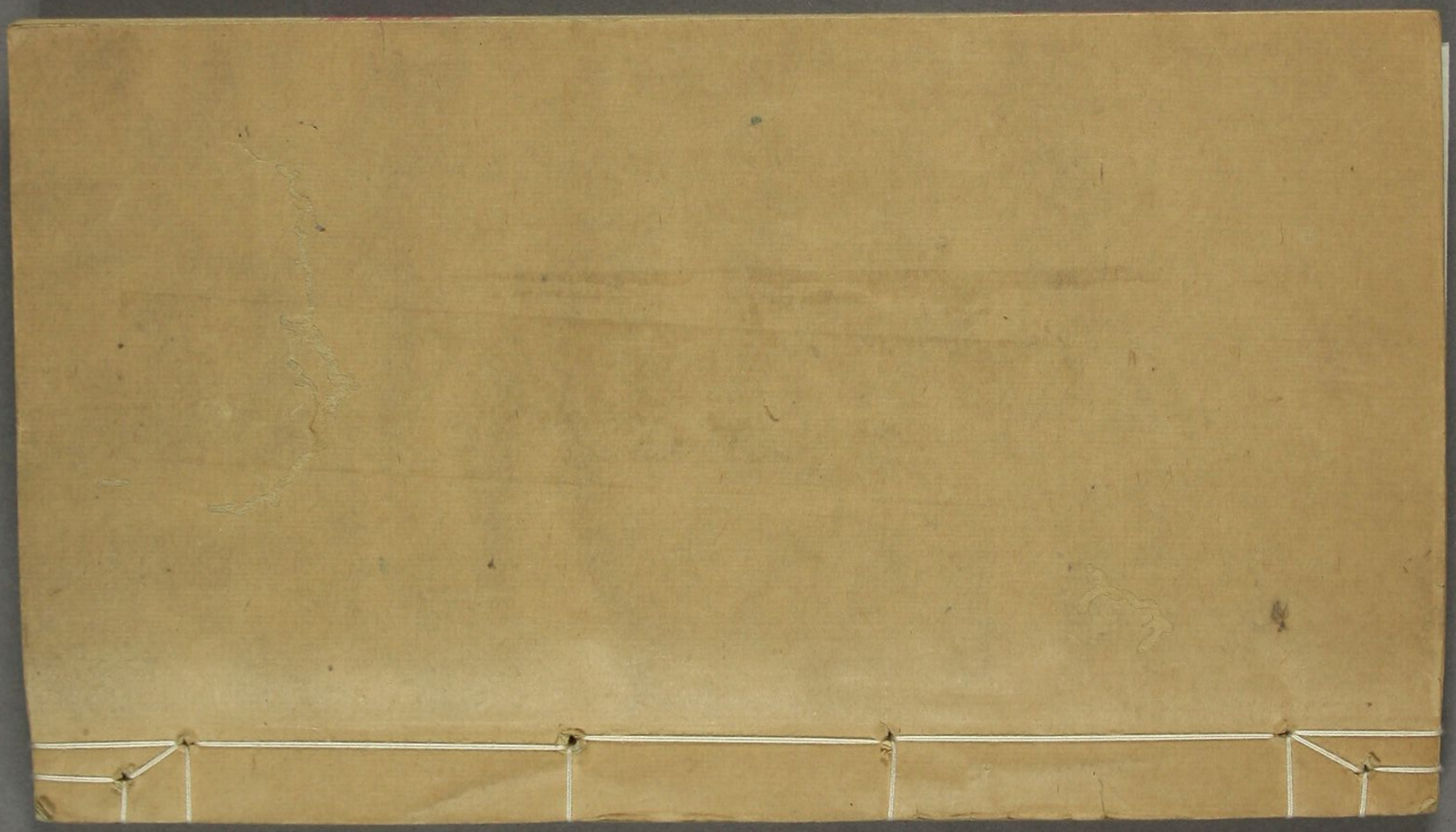
例
たとへ泉下の人となりてありつるせうはあら
ずとも（兎月物語京ら信）
たとひ妻が泉下の人となりて此の世に
生きてゐるなくとも（〃高砂浦）

佐野周より頼朝の文書りきと寫し給
へども、たゞ義経とあ賜はんと欲し給ふのみ
なりを陸奥とてこれが地をなすと意ひ
給ふなり

加藤玄智文庫

加藤玄智文庫

朝鮮總督府圖書之印

朝鮮總督府圖書之印

以下全て
白紙